

青少年の運動・スポーツ実施の有無に影響を与える要因 ：スポーツへの社会化の概念を援用して

住田 健（静岡産業大学）

藤本 淳也（大阪体育大学）

Influential factors on the involvement of youth in sport or physical activity: Applying socialization into sports

Ken Sumida

Junya Fujimoto

Abstract

The purpose of this study was to examine influential factors on involvement of youth in sports in two different school groups, junior high school and high school. The questionnaire had five criteria: demographics, significant others, past experience, satisfaction with school and physical education class, and attitude toward sports or physical activity. With the cooperation of the city in Japan, the questionnaires were randomly distributed to both junior high school and high school students. Uncompleted questionnaires were excluded from the analysis. The usable data for the analysis were 430 in junior high schools and 317 in high schools. In order to examine the characteristics of participants and non-participants, initially chi-square test was conducted. Then, logistic regression analysis was employed by the stepwise to investigate hierarchically the effects of factors on the involvement. As a result, there were distinctive characteristics between the participants and the non-participants at both school stages. With respect to the effects of the independent variables, significant influences of demographics on the involvement were recognized. Family as significant others did not influence the involvement at junior high school stage, but did at high school stage. Attitude, furthermore, had significant influence on the involvement in both school groups, statistically and its impact is assumed to be considerable; psychological variables need to be intensively examined in future studies. This study empirically demonstrated that influential factors were different in each school group. Moreover, logistic regression analysis is proved to be effective for studying sports involvement

1. 緒言

笹川スポーツ財団が行った「10代のスポーツにライフに関する調査」報告書によれば、青少年のスポーツ実施率は成長するにしたがって落ち込んでいくことが報告されている¹⁾。特に、我々が着目すべき点は、青少年の運動・スポーツ実施率は、中学校から高校へ進学する時に大幅に減少することであろう。その一方で、工藤（2007）は、彼女自身が行った研究の中では青少年の運動・スポーツ実施率は上昇している事例があると述べている。また、工藤は近年の青少年の運動・スポーツへの参与形態は多様になりつつあることも報告している。単に運動・スポー

ツをするだけでなく、スポーツの試合やイベントにボランティアとして参加する人も増えてきている²⁾。

我が国では、学校で課外活動として、青少年が運動・スポーツを楽しんでいる。つまり、日本における青少年のスポーツ活動は教育の一環として考えられている³⁾。長積（2015）が指摘しているように、運動・スポーツ活動の提供を教育というシステムに組み込んでしまうことは、青少年が教育期間の移行（例えば、小学校から中学校に進学する）する際に、行っている運動・スポーツを継続することが困難になるという結果の原因になる⁴⁾。例えば、小学校では野球をやっていた子が、進学した中学校に野球部

がないということも起こりえる。もし、我々が人々に生涯にわたって運動・スポーツの実施を楽しんでもらいたいとし、そのためのスポーツ振興政策を立案することを考えた場合には、教育システムの中に運動・スポーツ活動の提供を位置付けた現在の状態は望ましくないと言える。しかし、現在の教育システムを短期間で変更し、新しい運動・スポーツを提供するシステムを構築するのは不可能であろう。そこで、最初にどのような要因が青少年の運動・スポーツの実施と継続に影響を与えているのかを調べるべきであると考え。なぜなら、現在の運動・スポーツ活動を提供する教育システムの中においても、特定のスポーツを継続している青少年は存在している。何の要因が、彼らが運動・スポーツを継続することに影響を及ぼしているのかを知ることは、青少年に対する有効なスポーツ振興案を提供することの助けになるであろう。そこで、本研究の目的は、青少年の運動・スポーツ実施の有無に影響を与える要因を明らかにすることとした。

2. 先行研究のレビュー

本研究の目的を達成するために、スポーツへの社会化について書かれたレビューを行なった。先行研究をレビューする目的は、スポーツへの社会化に関する考えをまとめ、統合することにある。具体的には、2つの文献に着目する。最初の文献は、Cote and Hay (2002) によって書かれたものであり、そのタイトルは *Children's involvement in sport: A development perspective* である⁵⁾。もう一つの文献は、McPherson and Brown (1988) によって書かれたものであり、そのタイトルは *The structure, process, and consequences of sport for children* である⁶⁾。これらの文献はスポーツへの社会化の概念を青少年のスポーツの文脈において援用した研究であり、本研究に有効な視点を提供できるものと思われる。

社会化は、個人がある特定のコミュニティ（集団や組織など）のメンバーとなるために、必要とされるスキル、行動パターンの習得、そのコミュニティ

で大事にされている規範、価値観、動機を学習するプロセスを意味するものである⁷⁾。そして、スポーツへの社会化とは、運動・スポーツ実施者や消費者として特定のスポーツにおける役割を公式に、または非公式に学習し、獲得していく過程のことである⁸⁾。

幼少期から思春期にかけて、個人がある特定の競技スポーツに関わっていく社会化の過程は3つの段階に分けることができる⁹⁾。最初の段階は、抽出の段階 (*sampling stage*) である。この段階は運動やスポーツを経験していく段階であり、この時期に行っている運動・スポーツの基本的な動作、ルールなどを学んでいく。次に、専門化の段階 (*specializing stage*) に入っていく。これは、抽出の段階で経験した運動・スポーツの中から特定の種目を選択するようになる。そして、選択した種目における高度な技術や知識を習得していく段階である。最後に投資の段階 (*investing stage*) にたどり着く。この段階では、一つ特定の競技種目を行うことに対して、好意的な態度を保持し、その運動・スポーツに関わるために個人の資源（お金、時間、個人的なエネルギーなど）を惜しみなく使う（投資する）時期である。次の段階に移行するにしたがって、個人は心理的により彼らの運動・スポーツ実施に集中ようになる。例えば、抽出の段階では、幼児（個人）は運動・スポーツを行う楽しみに興味を覚えるが、専門化の段階に入ると、スポーツの技術や知識の習得からくる喜びや達成感などが彼らの最大の関心事となる。

補足すると、これらの3つの段階において、個人が運動・スポーツの実施からドロップアウトすることも指摘されている。ドロップアウトした個人が、競技スポーツからレジャー・レクリエーションの要素が強い（勝敗を気にしないなど）種目に転向することもある⁹⁾。

青少年がスポーツ参加を通してスポーツにおける役割を獲得する社会化の過程に注目した。彼らが強調することは、青少年のスポーツ参加は2つの関係

性から決定されることである⁶⁾。2つの関係性とは、社会構成と社会化の過程との関係性と、社会カテゴリーと社会化の過程との関係性である。社会構成は社会・文化制度によって形成される。社会・文化制度とは家庭や青少年が所属している学校などである。これらの社会・文化制度は、社会化の過程に影響を与える規範や価値を反映するものである。つまり、どの程度青少年がスポーツに関わっていくのかは、彼らが所属している社会・文化制度に大きく依存する。同様に、性、人種、社会階層などの社会カテゴリーも社会化の過程に影響を与えられている。青少年が生まれながらに、または後天的に所属している社会カテゴリーはスポーツ参与に影響を及ぼしていることが考えられている。例えば、黒人のアメリカ人の女性は、性別や社会階層ゆえに男性と比較してスポーツに関わることを動機づけられない⁶⁾。

Cote and Hay (2002) と McPherson and Brown (1988) の文献に共通することはスポーツへの社会化の概念を援用することの有効性を主張していることである。McPherson and Brown は、運動能力が同じであるにも関わらず、運動・スポーツに積極的に関わる者がいる一方で、全く実施しない者もいることに着目した。彼らは、なぜこのような現象が起こるのかということ、部分的ではあるが、スポーツへの社会化の概念が説明できると主張した。加えて、青少年が運動・スポーツ実施を継続し、高いレベルのスポーツ技術を獲得するために、彼らは長期間にわたって動機付けられるべきだというのが、Cote and Hay (2002) の主張である。それゆえに、青少年がスポーツに参加していく過程に注目する概念であるスポーツへの社会化を適用することは意味のあることだと考えられる。

McPherson and Brown (1988) と Cote and Hay (2002) は、青少年の運動・スポーツ実施を研究する際にスポーツへの社会化を援用することを推奨したが、この両者の間には違いも存在する。Cote and Hay (2002) はスポーツへの社会化を発達心理学的

な視点から説明している。彼らは、青少年個人の内面的反応に注目している。青少年が成長にするにしたがって、青少年の運動・スポーツ実施者は心理状態を発達させる。つまり、スポーツを単に楽しむ状態から、熟練を要する高度なスポーツの技術習得を望む状態に移行する。一方で、McPherson and Brown (1988) は社会学の概念を用いることでスポーツへの参与に影響を与える要因を明らかにしようと試みた。社会集団の影響、または青少年と社会・文化制度の関係性が、青少年がスポーツを初め、継続する機会がどの程度与えられるのかに影響を与えていると示唆されている。

これまで McPherson and Brown (1988) と Cote and Hay (2002) の文献に着目してきた。まとめると、スポーツへの社会化は、青少年の運動・スポーツへの参与を研究する際に有効な概念である⁵⁾⁶⁾。スポーツへの社会化の過程は(発達)心理学的要因と社会的要因が複雑に絡まり合って形成されている。スポーツへの社会化の過程の中で、青少年は彼らを取り巻く家族や学校などからスポーツを行うための機会を与えられ、スポーツを行い、それを継続するよう動機付けられる。つまり、社会・文化制度や社会カテゴリーが青少年のスポーツへの参与と最終的には彼らのスポーツに対する心理状態をも決定づける。

3. 分析の枠組み

ここでは、先行研究のレビュー簡潔にまとめつつ、分析の枠組みを提示したい。本研究では、日本における青少年(中学生と高校生)のスポーツ実施に影響を及ぼす要因を特定するために、スポーツへの社会化の概念を援用する。社会化を援用した枠組みは、これまでのスポーツ実施者を対象にした研究においても援用されている⁶⁾⁸⁾。Kenyon and McPherson と McPherson and Brown は、運動・スポーツに高いレベルで関与する人がいる、その一方で、全く運動・スポーツを実施しない人もいることに注目した⁶⁾⁸⁾。これは、スポーツ実施に関して、学習のプロセスが異なると考え、スポーツへの社会化をスポーツプロ

モーション研究に積極的に援用されるべきだと説いた。この Kenyon and McPherson (1973) の研究以降、スポーツ実施者の研究が盛んに行われ、スポーツへの社会化の概念を援用することが有効であることも示唆されてきている。例えば、英国の青少年を対象にした先行研究では、青少年がスポーツ・コミュニティのメンバーとして、他のメンバーから期待されている役割を学び、獲得していくプロセスを質的に明らかにした⁹⁾¹⁰⁾。これらの研究結果を踏まえ、Kenyon and McPherson (1973) 同様に、スポーツへの社会化の概念の援用を主張した。

Kenyon and McPherson (1973) によれば、スポーツへの社会化を促進する要因としてあげられるのが、(1) 個人の特性 (personal attribution) (2) 重要な他者 (significant others) (3) 社会化の状況 (socializing situation) であるとされている。本研究では、この 3 要因を社会心理学と社会学で用いられている調査項目を援用することで測定し、評価することとした⁸⁾。

4. 研究方法

4.1 サンプルング

東海地方にある A 市と教育委員会の協力を得て、A 市内の中学校と高校に質問用紙を配布した。対象となった学校は、地域の特性を踏まえて選択された。学校の担当教員がアンケート実施の説明を受けたのち、特定の時間に調査は行われた。質問用紙は直接学生に手渡しで配布され、担当教員の指導の元で回答は行われた。学生が回答を終わった後、担任教員が責任をもって調査用紙を回収した。分析の信頼性と妥当性を高めるために、ほとんどの質問項目に回答していない対象者 (例えば、質問用紙の半分に回答をしていないなど) は本研究の分析からは除外した。本研究の分析に使用したサンプル数は中学生が 477 名、高校生が 317 名であった。

4.2 測定項目

調査用紙は 5 つの指標を測定するように作成された。5 つの測定指標とは、個人のデモグラフィクス、重

要な他者、過去の運動・スポーツ実施の有無、現在の生活における満足度、そして、運動・スポーツ実施に対する態度である。これらの指標は、笹川スポーツ財団が行っている調査¹⁾と先行研究をもとにしている¹¹⁾。全ての測定項目はカテゴリー化によって処理できるように質問用紙を作成した。各項目の具体的な測定の仕方は以下の通りである。

- 個人的特性
 - 性別：男性 = 0、女性 = 1
 - 学年：1 年生 = 1、2 年生 = 2、3 年生 = 3
- 重要な他者
 - 家族における運動・スポーツ実施者の有無：いる = 0、いない = 1
- 過去の運動・スポーツ経験
 - 前学校期 (中学生は小学校期、高校生は中学校期) の運動・スポーツ実施の有無：行なっていた = 1、行なっていたが途中でやめた = 2、行なっていなかった = 3
- 現在の生活における満足度
 - 学校生活における満足度：とても満足している = 1、満足している = 2、不満である = 3
 - 運動・スポーツにおける満足度：とても満足している = 1、満足している = 2、不満である = 3
- 運動・スポーツ実施に対する態度
 - 運動・スポーツ実施に対する態度：高い = 1、中間 = 2、低い = 3

4.3 分析方法

まず、全ての測定項目とスポーツ実施者と非実施者の連関を調べるために、測定項目を独立変数、スポーツ実施者と非実施者のカテゴリーを従属変数とするクロス集計を作成し、カイ 2 乗検定を行った。

次に、運動・スポーツの実施を従属変数とするロジスティック回帰分析を行なった。ロジスティック

回帰分析の最初の手順として、中学校期と高校期の各期で、スポーツ非実施者に対する実施者のオッズ比を求めた。これはクロス集計におけるカイ 2 乗検定は、独立変数と従属変数間に何らかの連関があることを確認するためのものであり、カイ 2 乗検定スではスポーツ実施にどの要因が影響を与えているかまでは明らかにならないからである¹²⁾。オッズ比の算出は、カイ 2 乗検定を補完するものであると期待できる。

オッズ比の算出を行った後、独立変数の回帰係数を求めた。本研究の分析の枠組みでは、運動・スポーツの実施は従属変数として設定し、他の変数を運動・スポーツ実施に影響を与えうる独立変数として設定した。先行研究に倣い¹¹⁾、ロジスティック回帰分析はステップワイズ法を用いて行われた。

5. 結果

表 1 は対象者の特性を示している。中学校期と高校期の両方において、全対象者は運動・スポーツの実施者と非実施者の 2 つに分類された。実施者と非実施者の差異を検討するために、カイ 2 乗検定を行なった。中学校期の結果を見てみると、性別、学年、過去の運動・スポーツ実施経験、学校生活における満足度、運動・スポーツ実施に対する態度において統計的に有意な連関が見られた。特に、学年 ($\chi^2=23.314$, $p<.001$) と運動・スポーツ実施に対する態度 ($\chi^2=39.646$, $p<.001$) では、比較的大きな連関が見られた。

高校期の結果について、性別、学年、重要な他者、過去の運動・スポーツ実施経験、

表1. 中学校期と高校期における実施者と非実施者の比較

	中学校期				chi-square	高校期				chi-square
	実施者		非実施者			実施者		非実施者		
	n	%	n	%		n	%	n	%	
デモグラフィクス										
性別					8.162*					27.101***
男性	214 (203.3)	52.3	23 (33.7)	33.8		96 (72.9)	64.0	58 (81.1)	34.7	
女性	195 (205.9)	47.7	45 (34.1)	66.2		54 (77.1)	36.0	109 (85.9)	65.3	
学年					23.314***					14.436***
1年生	149 (138.0)	36.5	12 (23.0)	17.6		68 (54.2)	45.6	47 (60.8)	28.1	
2年生	115 (108.0)	28.2	11 (18.0)	16.2		51 (51.4)	51.4	58 (57.6)	34.7	
3年生	144 (162.0)	35.3	45 (27.0)	66.2		30 (43.4)	20.1	62 (48.6)	37.1	
重要な他者										
家族内の運動・スポーツ実施者の有無					3.933					6.791*
いる	222 (214.4)	54.1	28 (35.6)	41.2		69 (57.7)	46.0	53 (64.3)	31.7	
いない	188 (195.6)	45.9	40 (32.4)	58.8		81 (92.3)	54.0	114 (102.7)	68.3	
過去の運動・スポーツ実施経験の有無					12.111*					14.364***
していた	228 (218.7)	57.4	26 (35.3)	40.6		142 (133.0)	97.9	135 (144.0)	86.0	
していたが、途中でやめた	67 (64.6)	16.9	8 (10.4)	12.5		2 (5.8)	1.4	10 (6.2)	6.4	
していない	102 (113.7)	25.7	30 (18.3)	46.9		1 (6.2)	0.7	12 (6.8)	7.6	
満足度										
学校生活に対する満足度					8.083*					.794
とても満足している	205 (196.1)	52.8	25 (33.9)	37.3		46 (43.7)	32.9	47 (49.3)	29.7	
満足している	134 (136.4)	34.5	26 (23.6)	38.8		57 (59.7)	40.7	70 (67.3)	44.3	
不満である	49 (55.4)	12.6	16 (9.6)	23.9		37 (36.6)	26.4	41 (41.4)	25.9	
体育に対する満足度					5.357					.186
とても満足している	169 (160.4)	43.3	19 (27.6)	28.4		48 (44.9)	34.5	48 (51.1)	30.4	
満足している	142 (146.8)	36.4	30 (25.2)	44.8		61 (57.1)	43.9	61 (64.9)	38.6	
不満である	79 (82.8)	20.3	18 (14.2)	26.9		30 (37.0)	21.6	49 (42.0)	31.0	
運動・スポーツ実施に対する態度					39.646***					57.746***
高い	210 (189.2)	51.9	11 (31.8)	16.2		100 (70.1)	68.5	47 (76.9)	29.4	
中間	139 (144.7)	34.3	30 (24.3)	44.1		40 (49.6)	27.4	64 (54.4)	40.0	
低い	56 (71.1)	13.8	27 (11.9)	39.7		6 (26.2)	4.1	49 (28.8)	30.6	

Note: 数字は観測度数 (期待度数)、パーセンテージ、カイ2乗値を表す。

* $p<.05$, *** $p<.001$

運動・スポーツ実施に対する態度において統計的に有意な連関が見られた。ここで特に注目したいのは、重要な他者と過去の運動・スポーツ実施経験である。中学校期では重要な他者の項目において、統計的に有意な連関は見られなかったが、高校期の結果においては有意な連関見られた。青少年が高校期において、運動・スポーツを実施するかしないかに重要な他者が何らかの影響を与えていることが考えられる。

次に、過去の運動・スポーツ実施であるが、対象者 317 人のうち 275 人が中学校期で何らかの運動・スポーツを実施していたと答えている。しかし、そのうちの 135 人が高校では実施していない。この結果は、学校期が上がっていくに連れて、運動・スポーツ実施率が減少していくと報告した笹川スポーツ財団の調査結果¹⁾と同様である。

表 2 はステップワイズ法によるロジスティック回帰

分析の結果を示したものである。全ての独立変数が従属変数（運動・スポーツへの実施の有無）に与える影響（効果量）を調べるために、独立変数は順に回帰モデルへ投入された。中学校期の結果では、独立変数を投入していくごとに Cox and Shell の決定係数の値が上昇した。この Cox and Shell の決定係数はステップワイズ法によるロジスティック回帰分

析におけるモデルの当てはまりを示すものである。この Cox and Shell の決定係数は擬似決定係数と言われるものであり、1.0 を超えることもある。つまり、中学校期の結果では、全ての独立変数を投入したモデルが一番当てはまりの良かったものと言える。高校期の結果を見てみると、中学校期の結果同様に、Cox and Shell の決定係数は独立変数を投

表2. 各独立変数の偏回帰係数とモデルの決定係数（ステップワイズ法によるロジスティック回帰分析）

	中学校期					高校期				
	step1	step2	step3	step4	step5	step1	step2	step3	step4	step5
定数	.806***	1.064***	.429	.043	-.318	-1.493***	-1.812***	-4.202***	-4.742***	-5.080***
デモグラフィクス										
性別										
男性	.778**	.814**	.647*	.715*	.378	1.361***	1.492***	1.401***	1.458***	1.241***
女性	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
学年										
1年生	1.409***	1.393***	1.499***	1.417***	1.623***	1.373***	1.302***	1.425***	1.536***	1.605***
2年生	1.099**	1.082**	1.191**	1.142**	1.192**	.813*	.718*	.816*	.951*	1.059**
3年生	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
重要な他者										
家族内の運動・スポーツ実施者の有無										
いる		.503	.366	.341	.314	.783**	.713*	.655*	.798*	
いない		-	-	-	-	-	-	-	-	-
過去の運動・スポーツ実施経験の有無										
していた			.937**	.866**	.547		2.520*	2.422*	1.585	
していたが、途中でやめた			.891*	.761	.866		.892	.865	.477	
していない			-	-	-		-	-	-	
満足度										
学校生活に対する満足度										
とても満足している				.168	-.512				.531	-.441
満足している				-.336	-.586				.566	-.079
不満である				-	-				-	-
体育に対する満足度										
とても満足している				.811	.642				.240	-.144
満足している				.359	.318				.118	-.430
不満である				-	-				-	-
運動・スポーツ実施に対する態度										
高い					2.080***					2.772***
中間					.722					1.463**
低い					-					-
Cox & Shell R ²	.063	.070	.090	.105	.148	.131	.157	.197	.208	.300
ΔR ²	-	.003	.020	.015	.043	-	.026	.040	.011	.092

Note: イタリック体は参照カテゴリーであることを示す。

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

入するたびに上昇した。最も値が高くなったのは、全ての独立変数が投入された時であり（step5）、高校期においても step5 のモデルの当てはまりが良かったと言えよう。

表2には、独立変数の偏回帰係数も示してある。中学校期と高校期ともに、step5 のモデルの当てはまりがよかったことから、ここでは step5 のモデルのみに着目する。中学校期では、運動・スポーツ実施の有無に影響を与えている変数は学年と運動・スポーツ実施に対する態度であった。高校期の結果を見てみると、運動・スポーツ実施の有無に影響を与えた変数は、性別、学年、重要な他者、運動・スポーツ実施に対する態度であった。中学校期と比較して

みると、影響を与えている変数が増えていることが示された。次に各独立変数の偏回帰係数を解釈するために、次にオッズ比を見てみることにする。

表3はオッズ比の結果を示したものである。オッズ比の算出の仕方として、各独立変数の中で参照カテゴリーを設定し、それに対するオッズ比を求めた。中学校期の結果を例にとれば、男性のオッズ比は1.459であり、女性のオッズ比は1.000となっている。これは、男性（運動・スポーツ実施の有無）の女性に対するオッズ比を求めたという意味であり、男性のオッズ比は女性を軸に考えられているため、女性は男性の参照カテゴリーである。オッズ比が統計的に有意かどうかを判断するのに以下2つの

表3. オッズ比と95%信頼区間

	中学校期						高校期					
	n	S.E.	Wald	sig.	odds ratio	95% CI	n	S.E.	Wald	sig.	odds ratio	95% CI
デモグラフィクス												
性別												
男性	214	.326	1,344	.246	1,459	.770 - 2,764	126	.321	14,979	.000	3,458	1,845 - 6,482
女性	216	-	-	-	1,000	-	149	-	-	-	1,000	-
学年												
1年生	152	.393	20,478	.000	5,070	2,347 - 10,954	100	.413	15,172	.001	4,977	2,214 - 11,192
2年生	102	.410	8,460	.004	3,297	1,475 - 7,352	99	.396	7,714	.007	2,885	1,329 - 6,263
3年生	176	-	-	-	1,000	-	76	-	-	-	1,000	-
重要な他者												
家族内の運動・スポーツ実施者の有無												
いる	223	.311	1,021	.312	1,369	.744 - 2,518	111	.313	6,514	.110	2,222	1,204 - 4,102
いない	207	-	-	-	1,000	-	164	-	-	-	1,000	-
過去の運動・スポーツ実施経験の有無												
していた	237	.349	4,315	.116	1,729	.873 - 3,423	250	1,115	2,022	.155	4,829	.549 - 43,354
していたが、途中でやめた	70	.475	3,324	.680	2,378	.937 - 6,032	12	1,409	.115	.735	1,612	.102 - 25,524
していない	123	-	-	-	1,000	-	13	-	-	-	1,000	-
満足度												
学校生活に対する満足度												
とても満足している	218	.452	2,021	.155	1,900	.784 - 4,605	87	.419	1,118	.738	.866	.381 - 1,969
満足している	152	.438	.527	.468	1,374	.583 - 3,240	116	.383	.012	.911	.958	.452 - 2,032
不満である	60	-	-	-	1,000	-	72	-	-	-	1,000	-
体育に対する満足度												
とても満足している	173	.479	1,139	.286	.600	.234 - 1,534	87	.460	.918	.338	.648	.261 - 1,589
満足している	163	.412	2,026	.155	.556	.248 - 1,247	117	.406	.038	.845	.924	.417 - 2,048
不満である	94	-	-	-	1,000	-	71	-	-	-	1,000	-
運動・スポーツ実施に対する態度												
高い	202	.486	18,834	.000	8,002	3,088 - 20,734	131	.565	28,758	.000	15,987	5,283 - 48,374
中間	159	.379	3,623	.067	2,058	.979 - 4,325	94	.539	24,075	.007	4,317	1,502 - 12,408
低い	69	-	-	-	1,000	-	50	-	-	-	1,000	-

Note: イタリック体は参照カテゴリーであることを示す。

数値を参照した。一つ目は、オッズ比の値そのものが1以上であることであり、二つ目は、95%信頼区間に1以上であることである。

統計的に有意であった偏回帰係数をより解釈するために、オッズ比を検討する。中学校期のロジスティック回帰分析で運動・スポーツ実施の有無に影響を与えていた変数は、学年と運動・スポーツ実施に対する態度であった。中学校期の学年におけるオッズ比を見てみると、3年生を参照カテゴリーとし、1年生のオッズ比は5.070(95%CI=2.374-10.954)、2年生のオッズ比は3.297(95%CI=1.475-7.352)であった。これは、3年生と比較した時、1年生は5.070倍、2年生は3.297倍運動・スポーツ実施を行っていることを意味する。運動・スポーツ実施に対する態度のオッズ比は、低い群を参照カテゴリーとした時の高い群のオッズ比8.002(95%CI=3.088-20.734)、中間群のオッズ比2.058(95%CI=.979-4.325)であった。中間群のオッズ比は信頼区間の最小値は.979であり(95%CIが1以下)、統計的に有意なものであるとは認められなかった。高い群は、低い群と比較してより運動・スポーツを実施することが示唆された。

高校期における結果では、ロジスティック回帰分析で運動・スポーツ実施の有無に有意に影響を与えた変数は、性別、学年、重要な他者、運動・スポー

ツ実施に対する態度であった。表3に記載されている順にオッズ比を見ていく。まず、性別では女性を参照カテゴリーとし、男性のオッズ比は1.241(95%CI=1.845-6.482)となった。中学校期では認められなかった性別の影響が何らかの影響を与えていることが示唆される結果となった。学年では3年生を参照カテゴリーとした。その際の1年生のオッズ比は4.977(95%CI=2.214-11.192)、2年生のオッズ比は2.885(95%CI=1.329-6.263)と算出された。中学校期と同様に、学年が上がるにつれて、運動・スポーツを行わなくなっている。重要な他者では、現在、家族で運動・スポーツ実施していない群を参照カテゴリーとした時、いる群のオッズ比は2.222(95%CI=1.204-4.102)であった。家族の中に何かしらの運動・スポーツを行っている人がいると回答した対象者が、そうでない対象者と比較して2.222倍も運動・スポーツを実施していることが明らかとなった。最後に、運動・スポーツ実施に対する態度では、低い群を参照カテゴリーとし、高い群と中間群のオッズ比を求めた。高い群のオッズ比は15.987(95%CI=5.283-48.374)であり、中間群のオッズ比は4.317(95%CI=1.502-12.408)であった。運動・スポーツ実施に対して好意的な態度を形成するほど何らかの運動・スポーツを実施することが示された。

6. 考察とまとめ

本研究の目的は、青少年の運動・スポーツ実施の有無に影響を与える要因を明らかにすることであった。特に、中学校期と高校期に着目し、5つの測定指標を基に独立変数を設定し、運動・スポーツ実施の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。今から本研究の貢献をあげつつ、考察を行っていききたい。

本研究の貢献については、以下の二つがあげられよう。1つ目の貢献として、スポーツへの社会化の概念を援用することが、青少年の運動・スポーツ実施の有無に与える要因を調べる際の有効なツールであると示したことである。分析結果より、中学校期と比較して、高校期における運動・スポーツ実施がより多くの要因から影響を受けていることが示唆された。興味深いことは、中学校期では有意に認められなかった重要な他者の影響が、高校期の結果では有意に認められたことである。高校期の結果では、男性が女性よりも有意に運動・スポーツを実施していることが定量的に示された（女性を軸とした男性のオッズ比は 2.222）。この結果は青少年を取り巻く社会・文化制度のあり方が、青少年に対して運動・スポーツを実施及び継続するための機会を提供するという McPherson and Brown (1988) の指摘を支持するものでもある。また、高校期で女性に対する男性のオッズ比が高かったことも、社会カテゴリーとスポーツへの社会化の過程の間に関係性があるとした先行研究の結果⁶⁾も支持している。性別の影響が中学校期で認められなかったのは、性別という社会カテゴリーに基づく規範、価値、常識（イデオロギー）などを、個人が知覚し、理解しはじめるのが中学校期から高校期に移行する段階であるのかもしれない。もしくは、教育期間単位で運動・スポーツを実施するという日本のシステムでは、中学校期の運動・スポーツに関係する制度（例えば、部活動など）が女性の運動・スポーツ離れを防いでいるという解釈も可能であるかもしれない。社会・文化制度とスポーツへの社会化の過程、社会カテゴリーとス

ポーツへの社会化の過程の関係をどう理解するのか、またそれらの影響をどう測定するのかという点については、将来の研究の課題として考える必要がある。

社会学的要因（変数）の考察だけでなく、心理学的要因の考察もするべきであろう。本研究の結果から、中学校期と高校期ともに運動・スポーツ実施に対する態度を好意的に形成している人ほど運動・スポーツを実施していることが明らかとなった（表 2、3 を参照）。Cote and Hay (2002) は、個人が運動・スポーツへ社会化される過程は 3 段階（抽出の段階、専門化の段階、投資の段階）あり、段階を経るごとに特定のスポーツに対する心理的な側面（信念や態度など）も強化されると主張している⁵⁾。どのように青少年が形成している運動・スポーツ実施に対する態度が、実際の行動に影響を与えたかは明らかにはなっていないが、少なくとも、本研究の結果から Cote and Hay (2002) が指摘するように⁵⁾、青少年の態度などの心理的変数に注目する必要は示されたと言えよう。

2つ目の貢献として、ロジスティック回帰分析が（青少年の）運動・スポーツ実施を調べる際に効果的な分析方法であることを部分的ながら示せたことである。態度などの心理学的な変数を測定する場合、一つの概念を測るために複数の項目を設定することは珍しいことではない。しかし、調査対象者に多くの質問項目が記載された質問用紙に回答することはかなりの労力を強いるものでもある。また、多くの測定項目に回答しなければいけないような状況では、対象者が適当に回答してしまう可能性もある。そのため、特に本研究のように中学生や高校生を対象にする場合には対象者の負担を減らすことは考えられなければならない。本研究で使用したような比較的簡単な質問用紙を用いることは対象者の負担を減らすための有効な手段であり、ロジスティック回帰分析はカテゴリカルデータを扱う分析手法であるため、その助けとなることが期待される。

最後に本研究の限界と将来の研究課題について述べて本稿を終わりとしたい。本研究の限界として、

McPherson and Brown (1988) が指摘するように、スポーツへの社会化は、個人を取り巻いている社会・文化制度や、社会カテゴリーがどのように考えられているのかに大きく影響を受ける⁶⁾。本研究では、基本的な測定項目を使用したのみであり、スポーツへの社会化に影響を与えていると考えられる要因を考慮しきれていない。例えば、デモグラフィクスでは性別と学年を測定した。しかし、家庭内の収入状況なども今後の研究では含まれるべきであろう。また、大企業の工場がある地域などは移民の割合が比較的高い（例えば、浜松市など）。調査をする地域によっては人種や民族といった要因にも注目する必要がある。重要な他者についても、今回は家族のみに限定しているが、友人、指導者、もしくはメディアなどといったところにも焦点を当てていくべきである。

本研究では、東海地方の一つの市を対象にした研究である。東京を中心とする首都圏や大阪を中心する関西都市部では、青少年の運動・スポーツ実施に影響を与える要因は異なるかもしれない。また、日本は南北に長い国土であるために、気候などの影響も十分に受けることも考えられる。今後は、幅広くサンプリングを行なっていくべきなのであろう。

参考・引用文献

- 1) SSF 笹川スポーツ財団: スポーツ白書 10 代のスポーツライフに関する調査報告書; 青少年のスポーツライフ・データ 2002, 2002.
- 2) 工藤保子: 10 代のスポーツライフを検証する. 体育の科学, Vol.57(9):701-704, 2007.
- 3) Yamaguchi, Y. : Chapter7 Japan. In P. De Knop, L.-M. Engstrom, B. Skirstad, & M.R. Weiss (Eds.), *Worldwide trends in youth sport* (pp. 67-75). Champaign, IL: Human Kinetics, 1996.
- 4) 長積仁: スポーツ参加者を知る: するスポーツ. 原田宗彦編著, スポーツ産業論第 6 版 (pp. 70-85). 杏林書院: 東京, 2016.
- 5) Cote, J., & Hay, J. : Children's involvement in sport: A development perspective. In J. M. Silva III, & D. E. Stevens (Eds.), *Psychological foundations of sport* (pp. 484-502). Boston, MA: Allyn and Bacon, 2002.
- 6) McPherson, B. D., & Brown, B. A. : The structure, process, and consequences of sport for children. In F. L. Smoll, R. A. Magill, & M. J. Ash (Eds.), *Children in sport* (3rd ed., pp. 265-286). Champaign, IL: Human Kinetics, 1988.
- 7) Maccoby, E. E. : Historical overview of socialization research and theory. In J. E. Grusec & P. D. Hastings (Eds.), *Handbook of Socialization: Theory and Research* (pp. 13-41). New York, NY: The Guilford Publications, Inc., 2007.
- 8) Kenyon, G.S. & McPherson, B.D. : Becoming involvement in physical activity and sport: A process of socialization. In Rarick, G. L. (Ed.), *Physical Activity: Human Growth and Development* (pp. 302-332). New York, NY: The Academic Press, INC., 1973.
- 9) MacPhail, A., Gorely, T., & Kirk, D. : Young people's socialization into sport: A case study of an athletics club. *Sport, Education and Society*, Vol. 8(2), pp. 251-267, 2003.
- 10) MacPhail, A., & Kirk, D. : Young people's socialization into sport: Experiencing the specializing phase. *Leisure Studies*, Vol. 25(1), pp. 57-74, 2006.
- 11) Vilhjalmsson, R., & Thorlindsson, T. : Factors related to physical activity: A study of adolescents. *Social Sciences of Medicine*, Vol.47(5), pp. 665-675, 1998.
- 12) 太郎丸博: 人文・社会科学のためのカテゴリカル・データ解析入門. ナカニシヤ出版: 東京, 2005.

